

『十住毘婆沙論』に説かれる二三の教説

八 力 広 喜

察をしたい。

転女成男（変成男子）の教説

「釈願品」第五の終りに浄土思想との関連において転女成男の教説が説かれている。

「女人も仏を見て女形を転ずることを得とは若し一心に女形を転ぜんと求むること有つて、深く自ら厭患して、信解力有つて男身を誓願す。是の如き女人、仏を見ることを得ば即ち女形を転ず。」

「女人仏名を聞いて女形を転ずとは、此の事の因縁、見仏經中に説くが如し。」

という文である。「釈願品」は菩薩の十大願について註釈する部分であり浄土の相についての説明がなされる。従つて浄土思想との関連が明白であるけれども、こゝにひとつの疑問が残る。「見仏經中に説くが如し。」という「見仏經」は何を指すのであろうか。

『十住毘婆沙論』には経名をあげるもの、あるいは経名をあ

『十住毘婆沙論』には仏身論、多仏思想、浄土思想、業道論、解脱論、地獄思想など種々の教説が説かれているといわれる。教理上では古来より竜樹の浄土思想として「易行品」が注目され、主として浄土教研究者による研究が盛んであつた。しかし、「易行品」だけでなくこの論書全般に注目すべき教理の説かれていることがかつて平川彰博士により指摘せられた。

また、この論書の著者をめぐつて従来より二つの説が提示せられている。ひとつは干潟竜祥博士の説であり、他のひとつは平川彰博士の説である。さらに岩本裕博士は羅什による加筆の部分のあることを指摘せられた。

この論書は梵本、チベット訳のないこととあわせて著者問題をはじめ問題点が多い。本稿ではこの論書を十地経初地二地の註釈書というより仏教教理の一資料という観点で取り扱うことにしたい。この方法は早く平川彰博士などによつてなされたものであるが、こゝでは伝承により竜樹の著作といわれる他の論書との比較も考慮に入れて若干の教理について考

けないものなど多数の經典が引用されており、經名がなくても特定の經典の思想の影響を受けついでいると考えられる部分もある。例えば「易行品」第九と『無量寿經』系統の關係、「念仏品」第二十から「四十不共法中善知不定品」第二十三までと『般若三昧經』との關係などはすでに指摘せられているところである。こゝにいう「見仏經」は『般若三昧經』あるいは『無量寿經』を指すという見解があるがどちらの影響を受けているであろうか。たゞこの二經のうち『般若三昧經』には転女成男の思想が説かれていないようであるから、あるいは『無量寿經』系統の思想を受けついてもいいかも知れない。すでに平川彰博士、藤田宏達博士によって考察されているように転女成男説は古い教説であり『無量寿經』ばかりではない。そこで、「見仏經」を他の引用經典に求めても今のところ經名の明白なものでは該当するものがない。従つてこゝでは「釈願品」全体の記述を考慮にいれて『無量寿經』系統の思想の影響をうけたものと考えたい。

ところで転女成男説は『大智度論』にも説かれていることが知られている。即ち

「復次に經の中に説く。女人に五礙有り、釈提桓因、梵王、魔王、轉輪聖王、仏と作ることを得ず。是の五礙にて作仏するを得ずと聞いて、女人は心退き発意すること能わす。或いは説法する者あるも、女人のためには仏道を説かず。是の故に仏は此の間に

説きたもう。善男子、善女人よ、女人も作仏するを得べし。女身を転ぜざるに非らざるなり。」

という文である。「大智度論」では「女人の五礙」という『阿含經』以来の説を背景として作仏と関連して述べられているが、『十住毘婆沙論』にあらわれる転女成男説は淨土の十相の中において説かれるものであり、転女成男説の背景そのものが相違している。たゞ『十住毘婆沙論』と『大智度論』との表現を比較するとき『十住毘婆沙論』の説き方が積極的であるといえよう。

ところでこの「釈願品」についてひとつの問題点が指摘せられた。それは岩本裕博士によって提示されたものである。博士の説を要約すれば、「釈願品」は「仏国土を淨める」という十大願を説く宗教的実践行為を勧めている部分であり、そこで突然淨土の相の記述が説かれ仏国土の様相を描写するのは明らかに仏国土を淨めるという思想とは直接結びつかず飛躍している。従つてこの部分は後世の附加、特に羅什のであらう、という説である。さらに博士はこの論にはチベット訳など他の資料がないために断言することはできないとしながらも、別の理由として竜樹時代の論書形式、地理的要因なども考察の対象となし、さらには羅什の翻訳態度にも言及している。結論として博士は、『十住毘婆沙論』の詩形の部分はあるいは竜樹のものかもしれないが、註釈の部分はその

まゝ竜樹の真作と認めることができない。そして資料的価値は羅什の時代までさがるとされた。しかし転女成男説の部分が羅什の加筆であるかどうか論証することは困難である。その理由としてこの説の淵源は古く原始仏教にまでさかのぼることが出来るからである。また『般若経』などにもこの説が説かれていることが指摘せられているから、例えば竜樹が知つていても不思議ではないことになる。たゞ、博士の指摘されたとうり文脈が一定していないことは事実であり、その点この品には疑問が残るのである。いずれにしてもこの品における転女成男は『無量寿経』系統の思想をうけついでていると見ることにさしかえはない。

三十二相業

『共行品』第十八、「念仏品」第二十には仏の三十二相業が説かれている。三十二相業については最近高原信一氏による詳細な研究があり、その中で『大智度論』、『十住毘婆沙論』、『ラトナーヴァリー』、『宝行王正論』などについてもふれておられる。また先に爪生津隆真氏による研究もあつて、こゝで『菩提資糧論』の三十二相業についても言及しておられる。今これらの研究によりつゝ、竜樹の著作といわれている論書で三十二相業の説かれているもの、つまり、『十住毘婆沙論』、『大智度論』、『ラトナーヴァリー』、『宝行王正

論』、『菩提資糧論』の五本の三十二相業の關係についてふれておきたい。高原信一氏による考察では、『大智度論』が第三グループとしてあり、『十住毘婆沙論』、『ラトナーヴァリー』、『宝行王正論』は第四グループに入っている。これに『菩提資糧論』を加えるとこの論は『十住毘婆沙論』、『ラトナーヴァリー』の三十二相とよく一致することが指摘せられているから、高原信一氏の対照表では第四グループに入ることになる。従つて竜樹の著作といわれている論書の中では、『大智度論』だけが順序、訳語などにおいて全く相違していることが知られるのである。たゞ、羅什訳『摩訶般若波羅蜜経』と『大智度論』がきわめて近い關係にあることは当然である。また、『観仏三昧経』などにいわれる順観、逆観という観点からみると竜樹の論書はいずれも逆観ということになる。

また、平川博士により『大智度論』は有部との關係が深いことが指摘せられたが、三十二相業についてみてもそのことが論証される。『大智度論』の三十二相業と『大毘婆沙論』のそれとに類似性がみられるからである。

その他の教説

すでに諸学者により考察された教説もあるが、こゝで簡単にふれるならば、犢子部の教説として有名な五法藏説に対する『十住毘婆沙論』の立場などは犢子部との關係を想起させ

る。⁽²³⁾こゝでは、『中論』、『大智度論』と『十住毘婆沙論』の立場が大いに異つてゐることが指摘される。

また九分経、十二部経について『十住毘婆沙論』は九分経を肯定する立場を取るとされている。⁽²⁴⁾そして「念仏品」第二十にあげられる九分経の項目については水野弘元博士による考察があり、この九分経はどの部派の説をうけたものか不明であるとなしている。たゞ、この論が九分経を肯定的に扱つてゐることは事実であるが、十二部経についての言及もあることを指摘しておきたい。「大乘品」第三十に

「諸仏の正法を守護す、とは若し人能く諸仏の所教の法、所謂十二部経を守護し、以つて其の心に能く受くれば十善業道は能く此人をして阿耨多羅三藐三菩薩に至らしむ」⁽²⁵⁾

という文である。十二部経についての言及は見落しがなければこの簡書だけであると思われるが、この箇所では否定的に取り扱つてゐるとは言い難い。たゞ九分経の言及が多いという事実、また有部系といわれる『大智度論』の十二部経とは全く相違すること、更に『菩提資糧論』には九分経についてきわめて簡単ではあるが言及されてゐること、⁽²⁶⁾などから『十住毘婆沙論』の立場が注目される。

また、実践行では、十二頭陀支、六十五種戒などが言及されている。十二頭陀支説は「解頭陀品」第三十二において説かれるものであり、『大智度論』の十二頭陀支とは異系統で

『十住毘婆沙論』に説かれる二三の教説（八 力）

あることが指摘せられてゐる。⁽²⁷⁾また、六十五種戒は「護戒品」第三十一にでるものである。『十住毘婆沙論』では「宝頂経」「和合仏法」品中に説くとして引用している。しかし『宝頂経』つまり「無尽意経」の戒数は六十七戒、異訳の『阿差末経』は六十四戒で多少の出入りがある。⁽²⁸⁾六十五種戒は『菩提資糧論』にも説かれ、『菩提資糧論』ではやはり『宝頂経』の説を受けてゐる。⁽²⁹⁾従つてこゝでは『十住毘婆沙論』は『菩提資糧論』と関係深いことが知られるのである。

以上、若干の教説について考察をしてきたが、元来『十住毘婆沙論』に説かれる教説はきわめて多種であつて更に詳細に検討しなければならぬものも数多くある。たゞ、考察の範圍を竜樹の論書のそれぞれの關係という点に限定すると、以上の考察だけでも『大智度論』だけが特殊な位置にあることが知られる。最近のラモット教授の見解を考慮にいれるならばますますこのことが明白となるのであるが、岩本裕博士の指摘のごとく『十住毘婆沙論』の漢訳の型式から詩形の部分のみ竜樹までさかのぼりうるかどうかはさらに検討をしなければならぬ問題である。

- 1 佐々木月樵『大乘仏教教理史』（佐々木月樵全集第一巻）三一頁。
- 2 易行院法海「十住毘婆沙論易行品箋疏」三卷、香樹院徳竜

「十住毘婆沙論易行品開演日記」二卷（ともに『真宗大系』第

『十住毘婆沙論』に説かれる二三の教説(八 力)

三八四

- 五卷所収。望月信享「竜樹の十住毘婆沙論」(『浄土教之研究』二九五頁。所収)。同「第三編本願論」(『浄土教の起源及発達五六七頁所収)。上杉思朗「十住毘婆沙論研究序説」大谷学報34の2、35の1、35の2。
- 3 平川彰「十住毘婆沙論の著者について」印仏研5の2。
- 4 干潟竜祥「大智度論の作者について」印仏研7の1。R. H. kata: *Suṅkrāntavikrāmi-Pariprechā Prajñāpāramitā-sūtra*, p. 55, 73, 74.
- 5 平川彰「前掲論文」。
- 因みに、外国学者の見解は、ムールチもラナンもロビンソンもさらにラモットも、『十住毘婆沙論』について真偽を判定していない。ただ、ラモットだけが先の両博士の説をノートで紹介している。(T. R. V. Myrtil: *Central Philosophy of Buddhism*. London, 1960, p. 91.; K. V. Ramanan: *Nāgārjuna's Philosophy*. Tokyo, 1966, p. 35.; R. H. Robinson: *Early Mahāyānika in India and China*. Wisconsin, 1967, p. 27.; E. Lamotte: *Le traité de la Grand Vertu de Sagesse*. Tome III, Louvain, 1970, p. 44)
- 6 岩本裕『極楽と地獄』一二二頁～一二七頁。
- 7 平川彰「大乘仏教の教団史的性格」(宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』所収)。同『律蔵の研究』三四六頁。三五九頁など。
- 8 大正二六、三二頁下。
- 9 佐々木月樵、前掲書三四三頁。塩見徹堂「竜樹所引の大乘經典の二三について」宗教研究新第九卷六号。長谷岡一也「竜樹の浄土教思想」二一頁。
- 10 長谷岡一也「十住毘婆沙論の含む中論の思想」大谷学報35の4。
- 11 望月信享「浄土教之研究」三〇九頁。正確には「平等覚經」との類似性を主張している。
- 12 長谷岡一也、前掲書、一一七頁。
- 13 国訳一切經、釈經論部七、五六頁。(矢吹慶輝訳加藤章一訳註)
- 14 平川彰『初期大乘仏教の研究』二六二～二八二頁。藤田宏達「転女成男の思想」(一)(二)(国訳一切經印度撰述部月報38・39)。大正二五、四五九頁上。
- 15 平川彰『初期大乘仏教の研究』二六六頁。
- 16 ラトナーヴァリーにも同様な考え方がみられる。Ratnāvali V. 72. (北京版, 129卷, p. 182-4-2)。
- 17 高原信一『Mahāvastu 所伝「仏の三十二相」について』(仏教研究) No. 2. 国際仏教徒協会編)。
- 18 爪生津隆真『菩提資糧論』の竜樹真撰について』印仏研17の2。
- 19 大正一五、六四八頁下。
- 20 平川彰『初期大乘仏教の研究』七六七頁。
- 21 高原信一、前掲論文、九五頁。
- 22 平川彰、前掲書、七四二頁～七四五頁。
- 23 同、前掲書、七三九頁。
- 24 水野弘元、「大乘經典と部派仏教との関係」(宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』所収)。

26 大正二六、一〇六頁上。

27 大正三二、五二六頁上。

28 水野弘元、前掲論文。三〇二頁。

29 大正一三、一八九頁下〜一九〇頁中。同、五九〇頁上、中。

30 大正三二、五二〇頁中。

31 『十住毘婆沙論』では『菩提資糧論』をたびたび「助道経」の名で引用している。（大野法道『国訳一切経論集部』五、四〇頁参照）なお『菩提資糧論』が何故「助道経」とよばれたかについてはわからない。

32 外教との関連もみられる。今西順吉「竜樹によつて言及されたサーンキヤ思想―初期中観派におけるサーンキヤ思想（一）―」（北海道大学文学部紀要十六ノ二）。中村元『初期ヴェーダーンタ哲学』二〇六頁。

33 ラモット教授は『大智度論』の作者をいわゆる『中論』の作者としての竜樹と別人であると結論された。この点の詳細については、ラモット、前掲書序文ならびに、平川彰「É・ラモット教授の『大智度論フランス語訳註』第三巻について」印仏研19の2、四三五頁参照。

追記 なお É. Lamotte: Le traité de la Grand Vertu de Sage-ssu は北海道大学藤田宏達先生より借覧した。謝意を表します。

新刊紹介

辻 直四郎著

「サンスクリット文学史」

小B6判・本文三五四頁・定価七〇〇円
岩波書店・昭和四八年二月二七日